

[B年] 降誕前第5主日(2021年11月21日)**【旧約聖書日課】サムエル記上16章1～13節**

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かけなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」2サムエルは言った。「どうしてわたしが行けましょうか。サウルが聞けばわたしを殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえをささげるために来ました』と言い、3いけにえをささげるときになったら、エッサイを招きなさい。なすべきことは、そのときわたしが告げる。あなたは、わたしがそれと告げる者に油を注ぎなさい。」4サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのためでしょうか。」5「平和なことです。主にいけにえをささげに来ました。身を清めて、いけにえの会食と一緒に来てください。」

サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。6彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。7しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」8エッサイはアビナグブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」9エッサイは次に、シャンマを通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」10エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」11サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」12エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」13サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくグビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

【使徒書日課】テモテへの手紙一1章12～17節

12わたしを強くしてくださった、わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています。この方が、わたしを忠実な者と見なして務めに就かせてくださったからです。13以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。しかし、信じていないとき知らずに行ったことなので、憐れみを受けました。14そして、わたしたちの主の恵みが、キリスト・イエスによる信仰と愛と共に、あふれるほど与えられました。15「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に來られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。16しかし、わたしが憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。17永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

【福音書日課】マルコによる福音書10章17～31節

17イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」18イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。19『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」20すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。21イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」22その人はこの言葉に気を落とし、悲しみがら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

23イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」24弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。25金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」26弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。27イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」28ペトロがイエスに、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言いだした。29イエスは言われた。「はっきり言っておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てた者はだれでも、30今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。31しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

サムエル記上16章1～13節

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことで悲しんでいるのか。私はイスラエルの王位から彼を退けた。角に油を満らし、出かせなさい。あなたをベツレヘム人エッサイのもとに遣わす。私は彼の息子の中に、王となる者を見つけた。」2サムエルは言った。「どうして、私が行きましょう。サウルが聞いたら、私を殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえを献げるために来た』と言いなさい。3いけにえを献げるときには、エッサイを招きなさい。あなたがなすべきことは、その時に私が教える。あなたは、私がそれと告げる者に油を注ぎなさい。」4サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老たちは不安そうに出迎えて言った。「お出でになったのは、平和なことのためですか。」5サムエルは言った。「平和なことです。主にいけにえを献げるために来ました。身を清めて、私と一緒にいけにえの儀式に出てください。」こうして、サムエルはエッサイとその息子たちを清め、いけにえを献げるために彼らを招いた。

6彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だと思った。7しかし、主はサムエルに言った。「容姿や背丈に捕らわれてはいけない。私は彼を退ける。私は人が見るようには見ないからだ。人は目に映るところを見るが、私は心を見る。」8エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者も主はお選びにならない。」9エッサイは次にシャンマを通らせたが、サムエルは言った。「この者も主はお選びにならない。」10エッサイは七人の息子をサムエルの前に通してみたが、サムエルはエッサイに言った。「主はこれらのうち、誰をもお選びにならない。」11サムエルはエッサイに言った。「あなたの息子はこれだけですか。」エッサイは言った。「末の子がまだ残っていますが、羊の群れの番をしています。」サムエルはエッサイに言った。「人をやって、彼を連れて来てください。彼が来るまでは、私たちは食卓に着きません。」12エッサイは人をやって、彼を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。彼がその人である。」13サムエルは油の入った角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。この日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

テモテへの手紙—1章12～17節

12私を強めてくださった、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。主は、私を忠実な者と見なして、奉仕の務めに就かせてくださったからです。13私は、かつては冒涇する者、迫害する者、傲慢な者でしたが、信じていないときに知らずに行ったことなので、憐れみを受けました。14私たちの主の恵みが、キリスト・イエスにある信仰と愛と共に満ち溢れたのです。15「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、すべて受け入れるに値します。私は、その罪人の頭です。16しかし、私が憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまず私に限りない寛容をお示しになり、この方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。17永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

マルコによる福音書10章17～31節

17イエスが道に出て行かれると、ある人が走り寄り、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」18イエスは言われた。「なぜ、私を『善い』と言うのか。神おひとりのほかに善い者は誰もいない。19『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父と母を敬え』という戒めをあなたは知っているはずだ。」20するとその人は、「先生、そういうことはみな、少年の頃から守ってきました」と言った。21イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に与えなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、私に従いなさい。」22彼はこの言葉に顔を曇らせ、悩みつつ〔別訳→悲しみながら〕立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

23イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」24弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは重ねて言われた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。25金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通るほうがまだ易しい。」26弟子たちはますます驚いて、「それでは、誰が救われることができるのだろうか」と互いに言った。27イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできないが、神にはできる。神には何でもできるからだ。」28ペトロがイエスに、「このとおり、私たちは何もかも捨てて、あなたに従って参りました」と言いだした。29イエスは言われた。「よく言うておく。私のため、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は誰でも、30今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を百倍受け、来るべき世では永遠の命を受ける。31しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・11月21日「降誕前第5主日」の日課主題は「王の職務」。この日は、伝統的な教会暦では一巡りの終わりの主日で、「終末主日」とも呼ばれるが、近年の主流教会では「王であるキリストの主日」の呼称を用いている。キリスト教における「終末」の神学には、「キリストの再臨」という事柄が含まれるが、「終末」の故の「再臨」なのか、「再臨」の故の「終末」なのかで、意味付けが大きく違ってくる。つまり、前者であれば「再臨」は「終末」の中の一事象に過ぎないことになるが、後者であれば「再臨」は「終末」の前提であり、「終末」そのものを定義づける事柄になる。「終末主日」を「再臨のキリスト」の王的統治を前面に打ち出した「王であるキリストの主日」と呼ぶとき、「再臨」は「終末」よりも前面に押し出されており、より「現在化」された「再臨」および「終末」の神学を示唆するものとなっている。

・この日の旧約聖書日課は、「サムエル記上」から、預言者サムエルが最初に油を注いだサウル王に替わる王となるべき者としてダビデに油を注いだ出来事。使徒書日課は、「テモテへの手紙一」から、冒頭定型文に続いて序文として挨拶と祝福の祈りを記した箇所の終わりの部分。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、金持ちの男が永遠の命について主イエスに問うことから始まる一連の教えの箇所。

旧約日課(サムエル上 16章より)

・「サムエル記」上・下は、ヘブライ語正典で「前の預言者」の第三巻に区分される王国創生物語で、元来は一巻本として著されているが、初代サウル王の時代を扱う部分を上巻、続くダビデ王の時代を扱う部分を下巻と区別されている。サウル王は「ベニヤミン族」から立てられた王で、後の北王国領域を基盤としているのに対して、ダビデ王は後の南王国を建設する「ユダ族」の王でありながら、サウル王家を盟主とする北部諸部族を支配下に置き「ユダ・イスラエル連合王国」を成立させた王とされている。この連合王国は、ダビデ王および次代ソロモン王のときまで維持されるが、ソロモン王没後に解体してしまった。「サムエル記」は、この両王がともに、「シロの神殿」の伝統を継承する祭司・預言者サムエルによって油注がれ、「王」としての権威を付与されたものであることを物語る。「シロの神殿」は、モーセ物語に起源を持つ「神の箱」を安置してきた神殿であり、ペリシテ人によってこの神殿が破壊され、一時的に「神の箱」が強奪された(後に返還された)ことが契機となって、「シロの神殿」を拠り所としていたイスラエル(北部?)の人々が強力な王権樹立を望むこととなった。サウル王やダビデ王は、この「神の箱」の守護者としての役割を期待されて立てられた王として物語られている(ただし、両王とも「神の箱」の安置場所としての神殿を再建するには至らなかった)。「サムエル記」は、このような物語の中に王権・

王位の意義を見ており、その目的に合致している限りにおいて「正しい王」とみなす神学を、「前の預言者」全体の物語に対して提供している。

・日課箇所では、ダビデに油が注がれると、主の霊が激しく彼に降るようになったと描かれるが、同様のことがさらに詳細にサウルに対する油注ぎの場面でも描かれている(10章)。サウルの場合に詳述されているように、「主の霊が降る」ことは、「預言者」のように「預言する状態」になることを意味しており、王となる者に油注ぎがなされるのは、単に神的権威付けの為だけではなく、「預言者としての王」となることが期待されていることを示すものである。

使徒書日課(Ⅰテモテ1章より)

・「テモテへの手紙一」は、「手紙二」と共に、使徒パウロが若い協力者テモテに宛てて牧会(教会指導)上の助言を与えるために記した書簡として伝えられている。近代の聖書学者の中には、その助言内容がパウロ存命の時代にそぐわない組織化された教会制度や異端グループの存在を前提にしているのではないかとの疑義から、パウロの後継者らによる偽書「第二パウロ書簡」(パウロの名を用いた書簡)とみなす傾向があるが、「パウロ書簡集」の一書として正典化されたものであり、差出人を「パウロ」本人として読むことに何ら差し障りはない。宛先の「テモテ」は、「使徒言行録」16章でギリシア人の父とユダヤ人の母を持つ信者として登場するが、パウロの宣教団に同行するに際してユダヤ人らの手前、割礼を受けたとされている。

・12節「忠実な者」および15節「真実であり」は「ピストス」の訳で、「信仰」と訳される「ピステイス」と同根語。この語の原義は「忠実さ」「誠実さ」「確かさ」などで、人格間や事物間の関係性を示す。その意味で、「ピステイス」の訳語としての「信仰」は「信心」とは区別されるべき事柄で、「信頼/誠実」などの意味で理解されるべきである。「ピストス」は、パウロ書簡で広く用いられているが、特に本書簡での用例が目立つ(Ⅰテモ1:12,15、3:1,11、4:3,9,10,12、5:16、6:2)。

・13節「信じていない(とき)」は「アピスティア」の訳語で、これも「ピステイス」と同根の語に否定辞「ア」が付けられた語。パウロ書簡では、「ローマ書」に用例があり、「不誠実」または「不信仰」と訳されている(ロマ3:3、4:20、11:20,23)。

・15節「最たる者」は「プロートス」の訳語で、「第一の」「先頭の」「最初の」の意。「プロートス」は、「前/先」などの語義を示す「プロ」の最上級。類義語に「アルケー(初め)」があるが、「アルケー」のように最上位の地位を指す意味で用いられる用例はほとんどない。

・16節「忍耐」は「マクロテュミア」の訳語。「マクロ」は「長い/遠い」が語義。「テュミア」は、「犠牲を捧げる/虐殺する」が語義の「テュオー」、またこの語の派生語で「激情/激怒」を意味する「テュモス」の同根語。「忍耐」は、「虐殺するほどの激情から離れている」こと。

福音書日課(マルコ 10 章より)

・日課箇所は、共観福音書が並行して伝承している逸話で、人物設定に違いがみられるが、大筋はよく保存されている。(「マタイ福音書」の並行箇所が9月19日「聖霊降臨節第18主日」福音書日課で定められていた。当該資料「聖書と祈りの会 210915」も参照)。共観福音書を比較する中で、「マルコ」に特有の表現に注意しながら黙想する。

・日課箇所は、場面設定(17節)で「イエスが旅に出よう」とされるとしているが、「旅」は「ホドス」の訳語で、通常は「道」と訳される。「ホドス(道)」は広く用いられる語だが、「マルコ」では、冒頭の置いた「洗礼者ヨハネ」の紹介記事で 1:2~3「…あなたの道(ホドス)を準備させよう。…『主の道(ホドス)を整え、その道筋をまっすぐにせよ』と繰り返すことから始まっている。

・近寄って来た男が主イエスの前に「ひざまずいて(ゴニュペテオ)」と描写するのは「マルコ」のみ。「マルコ」だけは、「重い皮膚病の人の癒し」場面でも、病人が来て「ひざまずいて願い」(1:40)と描写している。この語は「膝をつく」動作を示す語で、必ずしも礼拝行為ではない。

・24 節の弟子たちの反応と主イエスが重ねて告げられた言葉は「マルコ」だけが伝える句。「神の国に入る」ことの困難さが強調されることになっている。一方で、「マルコ」は、27 節「神は何でもできるからだ」と神の絶対的な可能性を強調することもしている。

来週の誕生日 (11月21日~27日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-363 番「み神の力は」は、18 世紀前半の代表的な英語讃美歌作家 I.ウォッツが子どものための讃美歌集(1715 年)のために作詞したものに、V.ウィリアムズが紹介したイギリス民謡曲を組み合わせたもの。
- ・21-386 番「人は畑をよく耕し」(= I 422 番)は、18-19 世紀ドイツの文筆家マティアス・クラウディウスの長編詩「パウル・エルトマンの祝祭」の一部で、こどものための唱歌集に収録されて歌われるようになった。216 番「月はのぼりて」も同氏の作詞。曲は、216 番と同じハーゲン宮廷楽長として知られるヨハン・A.P. シュルツの作曲とされるが詳細は不詳。
- ・21-469 番「善き力にわれかこまれ」は、20 世紀前半のドイツ告白教会の牧師ボンヘッフアーが国家反逆罪容疑で獄中に置かれているときに作詞。婚約者にクリスマスの挨拶として送った手紙に同封されていた。曲は、旧東独のオルガニスト・アベルの作曲。

21-363「み神の力は」

I Sing the Almighty Power of God

1. We sing the mighty power of God / that made the mountains rise, / that spread the flowing seas abroad / and built the lofty skies. / We sing the wisdom that ordained /

the sun to rule the day; / the moon shines full at his command, / and all the stars obey.

2. We sing the goodness of the Lord / that filled the earth with food; / he formed the creatures with his word / and then pronounced them good. / Lord, how your wonders are displayed, / where'er we turn our eyes, / if we survey the ground we tread / or gaze upon the skies.
3. There's not a plant or flower below / but makes your glories known, / and clouds arise and tempests blow / by order from your throne; / while all that borrows life from you / is ever in your care, / and everywhere that we can be, / you, God, are present there.

21-386「人は畑をよく耕し」

Wir pflügen und wir streuen (Alle gute Gabe)

1. Wir pflügen, und wir streuen / den Samen auf das Land, / doch Wachstum und Gedeihen / steht in des Himmels Hand: / der tut mit leisem When / sich mild und heimlich auf / und träuft, wenn heim wir gehen, / Wuchs und Gedeihen drauf.

Refr.: 1.-4.

Alle gute Gabe kommt her von Gott dem Herrn, / drum dankt ihm, dankt, drum dankt ihm, dankt / und hofft auf ihn!

2. Er sendet Tau und Regen / und Sonn- und Mondenschein, / er wickelt seinen Segen / gar zart und künstlich ein / und bringt ihn dann behende / in unser Feld und Brot: / es geht durch unsre Hände, / kommt aber her von Gott.
3. Was nah ist und was ferne, / von Gott kommt alles her, / der Strohalm und die Sterne, / der Sperling und das Meer. / Von ihm sind Büsch und Blätter / und Korn und Obst von ihm, / das schöne Frühlingswetter / und Schnee und Ungestüm.
4. Er läßt die Sonn aufgehen, / er stellt des Mondes Lauf; / er läßt die Winde when / und tut den Himmel auf. / Er schenkt uns so viel Freude, / er macht uns frisch und rot; er gibt den Kühen Weide / und unsern Kindern Brot.

21-469「善き力にわれかこまれ」

Von guten Mächten treu und still umgeben

1. Von guten Mächten treu und still umgeben, / behütet und getröstet wunderbar, / so will ich diese Tage mit euch leben / und mit euch gehen in ein neues Jahr.
2. Noch will das alte unsre Herzen quälen, / noch drückt uns böser Tage schwere Last. / Ach Herr, gib unsern aufgeschreckten Seelen / das Heil, für das du uns geschaffen hast.
3. Und reichst du uns den schweren Kelch, den bittern / des Leids, gefüllt bis an den höchsten Rand, / so nehmen wir ihn dankbar ohne Zittern / aus deiner guten und geliebten Hand.
4. Doch willst du uns noch einmal Freude schenken / an dieser Welt und ihrer Sonne Glanz, / dann wolln wir des Vergangenen gedenken, / und dann gehört dir unser Leben ganz.
5. Laß warm und hell die Kerzen heute flammen, / die du in unsre Dunkelheit gebracht, / führ, wenn es sein kann, wieder uns zusammen. / Wir wissen es, dein Licht scheint in der Nacht.
6. Wenn sich die Stille nun tief um uns breitet, / so laß uns hören jenen vollen Klang / der Welt, die unsichtbar sich um uns weitet, / all deiner Kinder hohen Lobgesang.
7. Von guten Mächten wunderbar geborgen, / erwarten wir getrost, was kommen mag. / Gott ist bei uns am Abend und am Morgen / und ganz gewiß an jedem neuen Tag.